

オリンダ通信

第3号

「小井沼眞樹子宣教師と共に歩む会」会報

共同代表:松本敏之、大倉一郎
 事務局:横浜港南台教会 秋吉隆雄
 〒234-0054 横浜市港南区港南台 7-8-29
 Tel:045-833-5323 Fax:045-833-6616
 郵便振替口座番号:00210-2-97571

2年目のチャレンジ

小井沼眞樹子

いつもお祈りとご支援をありがとうございます。この2月末で、3年任期の最初の1年を過ごしたことになります。日本人が一人もいない教会で、日本語をまったく使わない宣教奉仕がどんなものかを体験してきました。聞いてもよくわからない、言いたいことが言えないもどかしさに我ながらよく耐えています。けれども、周りの人々との関係はとてよくいっていると思います。疲れて気分が落ち込んだときには、イエズス会の友人神父からよい「隠れ家」が提供され、そこでリフレッシュしています。

今回の通信では、2年目に入った宣教生活の新たなチャレンジについてお伝えしたいと思います。

★新しい生活

今年2月から、オリンダの友人ジャニのアパートからレシーフェに引越し、今までとはまったく違う生活が始まっています。今度は海辺ではなく、カトリック大学から歩いて10分の住宅街で、アパートが3棟建つ団地の中の一室です。古いアパートですが、最上階の6階で見晴らしと風通しがいいので気に入っています。このアパートから、アルト・ダ・ボンダーデ教会までは乗り換えなしのバス1本で行けるので、遠くなったわけではなく、昨年と同じように教会生活を続けています。



アパートの窓から見える景色

このアパートに、ブラジル人の男の子二人を同居家族として迎え、共同生活を始めました。一人は、「オリンダ通信」2号で紹介したアルト・ダ・ボンダーデ地区の14歳の少年。ミゲウ神父の仲介でカトリック大学の管轄下にある公立学校の7年生に無事編入が認められ、この2月から通学しています。もう一人はミゲウ神父の甥で22歳の青年。やはりこの3月から音楽学校でピアノを学び始め、近い将来、連邦大学の音楽科の受験を目指しています。

私はどうも物事をあまり深く考えずに行動を起こし、体験しながら事柄の内実を理解していく人間のようなのです。この共同生活の発端も、ジャニの家族の事情から引越しの必要性が生じ、私がアパートを決めた後、青年との同居の話が持ち上がり、その後少年の転入学が許可されるという具合でした。私が自分の意志で決めたというより、外からの強い意志で動かされたような感じでした。

ご存じのように、私は3人の息子の子育てをしており、男の子の母親役には苦勞よりも慰めと喜びを感じる人間です。それできっとこのような事態に運ばれたのかと思っ

ていますが、始めてみたら、予想をはるかに超えて大変な生活が現われてきました。まず日本人とブラジル人の文化の違いというものがベースにあります。それに加えて、男の子たちの成長過程で負わねばならなかった各自の問題から生じる生活習慣や行動原理の相違、言葉の壁によるコミュニケーションの不足など。

3か月たって大分事柄の真相がつかめてきて、少年の補習授業、心理療法師との面談など必要な手だてを整えつつあります。いのちのエネルギー全開の日々で、お陰様で? ぜい肉がとれてずいぶんスリムになりました。土、日は二人ともそれぞれ自分の家族や親戚の家に戻るので、しばらくは放心状態です。

★新生活の意義と喜び

ブラジルの負の歴史的遺産は、植民地支配と奴隷制度がもたらした貧富の大差と、富裕な権力者たちの腐敗、多くの貧困層の家族文化欠損という状況でしょう。それは13歳まで少年の育った環境そのものです。私はこれまで頭で知っているつもりだったことを、一人の男の子のいのちとつながることで、初めて生身の体で学ばされている気がしています。貧困と安全でない家庭環境がどんなに人格の歪みをもたらすか、そこから脱出し、受けてきた傷をプラス

の意味合いに転化し、固有の人格として統合していくまでには時間をかけて癒しのプロセスをたどる必要があるでしょう。この少年は一人の小さな犠牲者なのだと思います。

日々やっかい事を起こす彼を許し受け入れることができない自分と向き合うたびに、回心を迫られているのは私の方だという反省を与えられます。私自身が神の無償の愛で満たされていなければ到底やっていけない、その愛への渴望はとりもなおさず、日々キリスト信者にさせられていく体験として、私を復活のイエスに結びつけてくれます。私はこの生活によって、キリスト信仰の根本を真摯に生きざるを得ないように導かれていると思うのです。

こう思い至ると、困難な状況にあってもなお、こころに喜びが湧き起ってきます。そして、アルト教会の信徒たちの信仰はまさしくこれだと共感できるようになり、やっと私も彼らの仲間になりつつあると喜んでいきます。60歳を過ぎた私の、たぶん最後になるであろう宣教生活に、このような出会いと体験を与えられたことはなんと幸いでしょう・・・そう思うと、こころからの微笑みをもってまた少年を迎え入れることができ、そうすることによって自分らしさを取り戻すことができたように感じ、こころが落ち着きます。

青年のほうはカトリック信者の中流家庭で育ちましたが、途中ひきこもりの時期があったようでまだ高校生ようです。彼は超偏食で食事づくりに苦労しています。またごく最近、肝臓移植手術を受けた父親が、予期せず術後に召されてしまうという出来事が起こり、彼も新たな人生の困難に直面しています。

このような二人の人生の問題に関わるには、私はあまりにも訓練不足で許容量の小さな人間ですから、しばし限界状況に陥りますが、自分の力で何とかしようとは思わず、周りにあるよきネットワークに常にSOSを発信し、解決の手だてを得るようにしています。この小さな共同生活がエキュメニカル（教会一致）な性格を帯びていることは確かで、カトリックの友人たち、プロテスタントの仲間がみんな支え、応援して下さることも私の喜びとなっています。

★宣教の足場の確認—ドン・エルデルの軌跡をたどる

話は少し遡りますが、昨年早々、私のところに友人神父からある冊子がメールで届きました。

“DOM HELDER : memória e profecia no seu centenário 1909-2009”

（「ドン・エルデル生誕100年—その追憶と預言」）と題されたその冊子は、フランスを皮切りにヨーロッパ各地とブラジル国内で広範囲にわたって開催された展示会の内容を紹介するものでした。彼の生涯の軌跡が写真と共にコンパクトにまとめられており、これを日本語に訳して、ぜひ日本人たちにも紹介したいと思いました。

けれども、私はブラジル赴任前で訳す暇がないので、ラキネットの仲間に翻訳作業を託して出かけたのです。

スタッフが熱心にこの翻訳作業をすすめて、7月初旬には私のところに校正の依頼が届いていましたが、なかなか時間的、精神的ゆとりがないまま先延ばしになっていました。

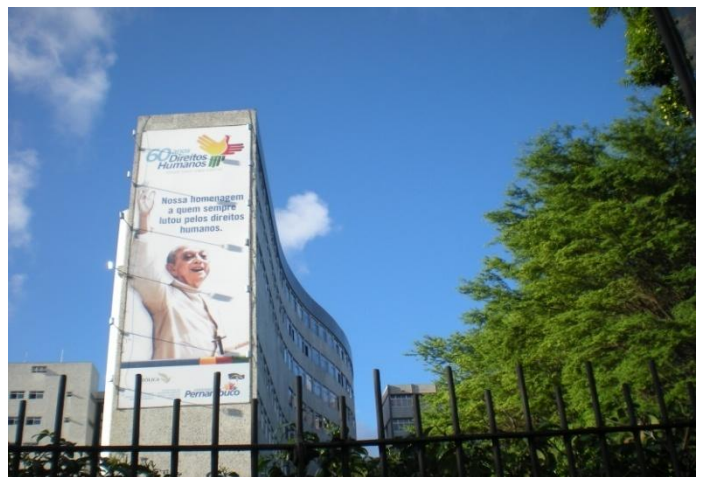
ブラジル研修旅行を終えた後、やっと、9月に予定されているラキネット研修会に発行が間に合うように急ピッチで校正作業に取り掛かりました。難解なポルトガル語を丁寧に読み進んでいくうちに、私はこの冊子が物語るドン・エルデルの信仰と生き様にぐいぐい引き込まれ、深い感動を覚えたのです。私がいま身を置いているこのレシーフェとオリンダで彼は大司教時代と引退後、生涯を閉じるまでの35年間を過ごしています。友人ジャンニは青年活動で、ドン・エルデルの人となりに直に接していたそうです。

冊子の中でこころ打たれた言葉。

—キリスト生誕から2000年経った現在、人類の3分の2が人間以下の生活条件のもとで、貧困と飢えにあえいでいる。全人類の20%の人間が地球上の富の80%を消費し、残りの80%の人間はその富の20%以下で満足せざるを得ない。

—事実、この第3世界で人々と寝食を共にし、彼らを援助するために命を捧げることは可能かもしれない。しかし、あなたたち（裕福な兄弟）の側で様々な変化が起これば、私たちの間でも本当の変化が起こり始めることが、次第に明らかになってきた。

この小さな私も、先進国の一員として回心し、ブラジル宣教師となって、ドン・エルデルの軌跡のあとを、及ばずながら歩まされているという意識を明確にさせられました。



カトリック大学の壁にもドン・エルデルの肖像が

なお、この冊子に興味のある方は、ラキネット事務局へお問い合わせください。

ラキネット事務局
<http://www.latinamerica-ch.net/>

★回心の出来事

初めからの経緯を知らない方のために、どうして私がブラジル宣教師として人生の後半を歩み出すようになったのか、振り返ってみたいと思います。

もう24年も前のこと、1986年4月に初めてブラジルと出会いました。学童期の息子3人と一っしょに会社員だった夫のサンパウロ転勤に伴っての移動でした。

日本からの企業の一員であることは、否応なしにブラジル社会の数パーセントの金持ちの生活を保障されていました。そこで目にしたのは、多くの路上生活者の姿でした。そしてその横をなすすべもなく通り過ぎながら教会生活をしている自分の姿と向き合わされ「キリスト信者であること」を強く問われました。そして、ラテンアメリカから提示された世界の「構造的罪」について、先進国の一員である自分の問題として実感し、生き方を変えるように促されたのです。

この第2の回心は、ブラジルで貧困と苦難を負う民衆との出会いがなければ決して起こらなかったでしょう。それは彼らの苦難の中に十字架を負うイエスの姿を見、私が新たに福音（罪の赦しと神の愛）と出会う体験でした。そしてまた、その民に仕えている一宣教師の「キリストの似姿」に、強く惹きつけられたことも大きな誘因でした。人生の後半をブラジル宣教にささげよう、個人的信仰深さでは解決のつかない世界の貧富の差を乗り越えて、共に生きる関係づくりの懸け橋として生きていきたいという願いが与えられました。

90年末に帰国後、5年間、宣教師になるために勉学準備し、1996年から2006年まで夫と共に教団宣教師としてサンパウロにある日本人教会を拠点に働きました。難病に倒れた夫と2006年に帰国、夫が召される時に「あなたの使命を自由に果たしなさい」と言い残し、そのための経済基盤も遺してくれました。また「ラテンアメリカ・キリスト教」ネット（以下、ラキネットと略す）が夫の遺志を継いだ形で発足し、「交流と連帯」を活動目的の一つとしています。2009年3月、私は教団から派遣された宣教師としてブラジルメソジスト教会に赴任しましたが、同時にこのラキネットの一員としても、ブラジルの貧しい共同体との「交流と連帯」の橋渡しの役をすべく歩み出したのです。

ドン・エルデルの生誕100年のまとめを学んで、気がついたことがあります。私たちがブラジルと初めて出会った86年は、軍政が終結した年で、その前年にドン・エルデルは保守派によって大司教の座を追われ、悲痛な生活を余儀なくさせられていました。99年にブラジリアで3ヶ月間の語学研修を受けていた時、たまたま上院議会を訪問見学中に、議員たちが彼の誕生日を覚えて次々に祝福の挨拶を述べ、驚かされたことを思い出しました。政治家たちからもこんなに尊敬されているエルデル・カマラ大司教とはどういう人物だろうと。

そして彼が逝去したのが同年8月、私は9月に日本で正教師試験を受けて合格、10月25日に按手礼を受けようやく牧師として立たせられたのです。昨年2009年に按手礼10周年を迎え、アルト教会の皆さんに囲まれて祝い感謝しながら、ノルデステの民の間にいる自分を不思議に思ったのでした。

ドン・エルデルの生涯と、自分の人生のつながり具合が見えてきたとき、そこに大河の流れのような神のご意志が働いていると気づかされます。一筋の水流に過ぎない小さな者であっても、大河に与していることをイメージすることで、勇気と忍耐を新たにさせられています。

★経済支援の成果

最後に、皆さんからご協力いただいている経済支援の現時点での成果についてご報告いたします。

① 連帯基金を発足させました。

これはアルト・ダ・ボンダーデ教会の会員に対して、何らかの職につながるための少額の融資を低利で提供するものです。イヴァン牧師、信徒リーダーたちと一っしょに実施案を練り、規約を作成。今のところ私が責任者となり実施しています。現在3名がこの融資を利用して小さな商売を始め、返済も定期的になされています。

② 音楽教室が始まりました。

日本とサンパウロに音楽献金の協力を呼びかけ、目標額の年間50万円を超える献金が与えられました。ギターとエレクトーンの講師も見つかり2月の末から教室を開くことができました。けれども、4月にエレクトーンの講師が都合で辞退し、今代わりの講師を探しています。ギター教室は週2回（水、金・夜7-9時）8名の生徒が喜んで通っています。また、2010年の世界祈祷日献金の一部をアルト教会の音楽プランのために頂けることになり感謝しています。

引き続き、ご協力をよろしくお願いいたします。



楽しそうにギターを習う生徒たち

会計報告 (2009.11.1～2010.4.30)

※ 数値は割愛しています

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
会費・特別献金		事務・通信費	
音楽献金		海外保険	
		「福音と世界」1年分	
		振込手数料	
小計		小計	
前期より繰越		次期へ繰越	
合計		合計	

年会費・特別献金者名

省略

(76 件)

音楽献金者名

省略

(25 件)

〽 〽 〽 〽 〽

編集後記

事務局 秋吉隆雄

「オランダ通信 第3号」をお届けいたします。

眞樹子師がアルト・ダ・ボンダーデ教会へ宣教師として赴任されて1年3ヶ月が経ちました。言葉も文化も違う中で、耳を澄まして言葉を聞き取り、心を開いて文化を受け入れ、誠実に奉仕をしておられます。新しい企画を立ち上げて、生活や教育の向上に取り組んでおられます。時々、電話がありますが、日本語が出ずに、ポルトガル語が口をついて出ています。日本語を忘れるくらいになっているようです。

眞樹子師は、どんなことでも、それらを肯定的に捉え、積極的に展開していく信仰を持っておられます。その福音的姿勢には本当に敬服いたします。

4月28日(金)、大久保徹夫氏に会計監査をしていただきました。「いくつかの改善すべき点がございましたが、会計処理そのものは適正と判断いたします。」というコメントをいただきました。次年度は改善した報告を出します。

眞樹子師は9月に一時帰国をされます。9月26日(日)に横浜港南台教会で礼拝説教をしていただきます。そして、午後3時から「ブラジル宣教報告会」をいたします。詳しい宣教内容を聞くことができますと思います。後日、お知らせいたしますが、予定に入れて、ご参加ください。

日本人のいない地で奮闘しておられる眞樹子師の宣教活動を覚えてお祈りくださり、変わらぬご支援をお願いいたします。